

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

## CONTENTS

- 15年前、今、そして未来へ……………1
- ネパールYOUTH交流スタディツアー報告……………2~3
- ラオス森とともに生きる……………4
- 変化するネグロス……………5
- パキスタン報告……………5
- カンボジア里親型支援始めます……………6
- ヨッコのグローバルeye……………7
- ラトルスネイク・アニー平和を歌う……………7
- 活動日誌……………7
- INFORMATION……………8

## 15年前、今、 そして未来へ

理事長 丸谷士都子

地球の木は今年設立15周年を迎える。会報「地球の木」副刊号を読み直してみた。「地球の木は、多国籍企業や大規模な政府開発援助によってもたらされた環境破壊や人権の抑圧に対して、国による外交だけではなく、それぞれが自立した市民と市民、地域と地域の連帯を強めること、それが今ある環境・人権・平和の問題解決に最も必要なことと考え、設立された」とある。さらに、「世界の人びとが、そして私たちがどのような暮らし方をすることが環境・人権・平和を守ることになり、真に豊かな地球をつくるのが、考え活動していきたいと思う」と書かれている。この理念は今も変わっていない。

当時、運営委員であった国際問題評論家の北沢洋子さんも、アジアの人々の活動を学び、相互に経験を交流することが重要であると述べている。「地域住民の間の組織づくり、人間の相互の関係、そしてどんな苦しい状況の中でも生き抜いていくたくましさなどは、私たちよりはるかにすぐれている」とも書いてあった。

15年経ち、このような交流の蓄積が地球の木の大きな原動力となっていると感じる。

最近の例をあげてみよう。今年2月に実施したネパールYOUTH交流スタディツアーに5名の学生が参加した。パートナーであるSOARSのユースクラブと交流して驚いた。高校生や大学生たちが、若い力を結集して、よりよい村を作るために活動していた。混乱のさなかにある国の状況にもめげず、若者たちが、将来の目的をしっかりと持ち、明るく楽しく一歩一歩あゆんでいる様子を見て、日本の学生たちは大きな学びを得た。

SOARSユースクラブのメンバーが、せりふのない寸劇をおこなった。下を向いて座る村人たち。そこへカメラとリュックを背負った男がやってくる。村人たちをじろじろ



ネパールにて

眺め、対話もなく、写真を撮ったり、レポートを書いたりする。その後、「開発」と書かれた黒板の後ろにお金を落とし、黒板を動かそうとするが、ひとりでは持ち上げられない。男は何度も村を訪れ、お金が村に落とされるが、「開発」はびくともしない。男が去った後、村人たちは立ち上がり、お金には見向きもせず、みんなで力を合わせて黒板を動かそうとすると、簡単に動き、村人たちは満足そうな顔をする。

この演劇を使った手法は、参加型農村開発の専門家であるカマル・フヤルさんが指導したもので、多くの国際機関、政府開発援助、NGOがネパールに入り、必ずしもよい成果を出していないことを表したものだ。誰のための開発かが問われている。ネパールだけでなく、カンボジア、アフリカなど世界各地で大金が動き、様々な利権がからむ開発が貧富の差をますます拡大している。地球の木がめざす市民と市民の交流の大切さ、そして私たちが変わらなくては問題は解決しないことが浮かび上がる。

ラオスでも、フィリピンでも、カンボジアでも、それぞれの支援地との関係が築かれるにつれ、互いに学び合うことができ、国内での地球市民教育へとつなげている。

2006年からの3年間のテーマを「食・環境・平和」と定めた。ネパールやカンボジアでは新しい展開が始まる予定だ。地球の木の特色でもある地球市民教育は、新しい教材づくりやファシリテーター養成を通して継続し、新たに地球市民交流事業としてスタディツアーや地球市民教育の交流を進めて行く。15周年記念事業では、プロジェクトの会員モニターを企画し、会員が支援地を視察し、村人たちと触れあう機会を作る。さらに多くの人々が気軽に地球の木に関心を持つことができるようなイベントを実施し、会員と共にますます力強い活動を繰り広げていきたい。



カトマンドゥ市内でショッピング

ネパールは今、激動の時代を迎えています。国王の専政に対する国民の不満が爆発し、首都カトマンドゥはデモに参加する30万人の人々で埋め尽くされました。国王は4月21日テレビ演説をし、国民に権力を返還すると発表、主要7政党に首相を推薦するよう要請し、昨年2月以来の国王直接統治に終止符が打たれました。

幸い、「ネパールYOUTH交流スタディツアー」の時期、イマドール村近辺は平穏で、ツアーを実施することができました。今回のツアーでは、イマドール村のユースクラブだけではなく、カイラリ郡のユースクラブのリーダーたちとも交流することができました。報告会でそれぞれの成果を発表する5人の若者たちの満ち足りた笑顔を見て、スタディツアーは『究極の地球市民教育』であることを再確認しました。

2000年にイマドール村を訪問した時、まだ十代だった若者たちがユースクラブを作りたいという夢を語った光景をはっきり覚えています。それ以来、地球の木が支援してきたSOARSユースクラブのメンバーたちは成人し、それぞれの職場で真剣に地域改革に取り組んでいます。最近では、3人の女性メンバーが自主的に、自分の母親たちを含めた成人女性のための識字教室を始めました。イマドールのユースクラブの活動は極西部の支援地だけでなく、さまざまな地域にも伝わり、多くの若者たちに影響を与えています。さて、「ネパールYOUTH交流スタディツアー」は日本の若者たちの心に何を残したのでしょうか。報告集からの抜粋をお届けします。

(乳井 京子)

### スタディツアー日程

- 2/12 (日) 成田発-バンコク着 バンコク泊
- 2/13 (月) カトマンドゥ着 ナガルコットへ ネパール教育事情講座
- 2/14 (火) イマドールにて女性グループとのワークショップ ユースクラブ主催の識字教室見学・交流  
リタさん宅訪問 ユースクラブのメンバーたちと交流会
- 2/15 (水) 学校訪問・交流 ホームステイ
- 2/16 (木) カマルさんのワークショップ 日本・ネパール ユースクラブ共同計画づくり  
ダンスパーティー
- 2/17 (金) カトマンドゥ市内観光 お別れパーティー
- 2/18 (土) カイラリユースクラブとのミーティング ニルマラさんの実家訪問 カトマンドゥ発
- 2/19 (日) 成田空港にて解散

## NEPAL YOUTH STUDY TOUR かけがえのない体験

吉澤 詩苑

一週間に及ぶスタディツアーが終わり、日本で日常生活に戻って行く中で、ネパールでのかけがえのない体験が今、じわじわと染み渡ってきている。

今回のツアーの目的を①ネパールでの青少年の活動②教育がどのように行われているか、教育のねらいは何か③地域とは何か。この3点について知ることと決めた。現地に着いて、学校見学、ネパールユースクラブ、女性グループとのワークショップ、識字教室見学、人々とのおしゃべりなどを通して、自分なりの答を探していった。その結果

①若者たちは、自分達の地域をよりよいものにするという大きな理念に沿って、識字教室、壁新聞、環境キャンペーンなどに真剣に取り組んでいる。

②学校では「社会に貢献する人材を育てる」「自分のことだけでなく、周りのことも考えていける人間に育てる」教育を目指しているという。

③同じ地域で暮らす人々がひとつの家族のように協力し合っていて生きている。それを地域と呼ぶ。という答を得た。

人々は、自国のそして自分の良いところをちゃんと知っていて、そのことに誇りをもっている。それを周りが認め、能力を発揮できる場が与えられているのはすばらしいと思った。しかし自分のことだけでなく、あくまでも周りと共にということを中心に置いている。私も周りに目を向け肩の力を抜いて、より良い社会を作る第一歩になるようネパールで学んだことを学業、ユース活動に還元して頑張っていきたいと思う。  
(地球の木ユースクラブ代表)

## NEPAL YOUTH STUDY TOUR 子どもたちの夢

乳井茉莉恵

「将来、何になりたい?」とたずねたら、日本の子ども達はなんと答えるだろう? 「別になんでもいい」「とりあえず金持ち」「楽しんでお金が手に入ればいい」。以前私が会った子ども達の多くは自分で限界を見極め、あきらめたような態度で、周りの笑いを誘って答をごまかすことがよくみられた。今回訪れたネパールの子も達は、恥ずかしがりながらもひとりずつ立って、看護師、歌手、兵士、バレーボール選手など、はっきりと自分の夢を語ってくれた。なれる保証、があるわけではない。しかし周りはそれを茶



皆で「ナマステ〜」

化すこともなくお互いの夢を尊重している。私は子どもらしくていいなと思った。歌手になりたいという子たちが歌をうたい、詩のうまい子が自分の詩を朗読したりして歓迎してくれた。

日本では、平等という名のもとに、全員に同じ事をさせるという教育が主流である。運動会のかけっこでも順位をつけず、上手だからといって個人に歌や踊りを披露させることもない。この違いが、子ども達が夢を語る姿勢となって現れているように思う。

もう一つ、気付いたことがある。現地に着いてからずっと親切を受け、そのたびに「ダンニヤバツ（ありがとう）」と言っていたが、何日か経って親しくなった時に、「親しい人同士では感謝の言葉は言わないものだ。親しい人に何かをしてあげるとは当たり前前で、些細なことであり、ありがとうといわれると親しさが失われるように感じる」と言われた。積極的に人に何かをしてあげることが当たり前で、日本のネパールと、何でも与えられ受身している事が当たり前で、二つの社会環境の違いを考えさせられたツアーだった。

### NEPAL YOUTH STUDY TOUR ネパールでもらった宿題

塩入 崇

私が今回の旅行で強く感じたことは「再発見」という事です。ネパールの教育、哲学、心理学についての話を聞き、日頃使っていない頭をガツンと殴られたように感じた。学校を訪問した時には、「日本は先進国であるのになぜ米国に留学するのか」また「日本では差別はないのか」など考えたこともなかったような質問をされ、答に窮した。自国にも目を向けなければと改めて感じた。他の国から見た日本。そして自分という人間。大きな課題を突きつけられたツアーだったが、良い面を伸ばすというネパールで学んだ考え方と重ね合わせて答を探っていきたい。

### NEPAL YOUTH STUDY TOUR 言葉とコミュニケーション

筒井 早紀

初めてネパールのスタディツアーに参加して、特に強く感じたのは、言葉の可能性と重要性だった。

最初にユースクラブが始めた識字教室と現地の学校2校を訪問し、直接、生徒と話をした。

皆、英語で私達に話しかけ、夢を語ってくれた。私は自分の英語力不足を痛感し、もっと英語を勉強してもっと話をしたいという気持ちになった。なぜ英語を学びたいのかという目的が明確になった。

次にカイラリ郡からはるばる会いに来てくれたタルー族の人々との交流を通してネパールでは64もの言語が使われているということがわかった。ひとつの国で複数の言語に触れたことは新鮮な驚きだった。言葉が殆ど通じない中でコミュニケーションをはかるのは至難だったが "I love you"

をタルー語ではどう言うのかと、ジェスチャーとわずかなネパリー単語を駆使して質問したことがきっかけで、仲良くなることができた。言葉や文化の壁を乗り越えるために、自分の知っている言葉に頼るのではなく、相手のことを学びたいという姿勢を見せることが大切だと思った。

このツアーでの一番大事な思い出。それは人々との出会いだった。訪れる先々で"ナマステ"と、私達をすばらしい笑顔で受け入れてくれた。私もこのような笑顔を身につけたい。

言葉が通じなくても心は通じる。わからない言葉は聞けばいい。それがまた新しいコミュニケーションになるのだから。滞在中、私の印象に残ったのは言葉、言語だったが、ネパールでは感謝の気持ちは親しい間柄では言葉で伝えるより、気持ちをこめてにつこりほほ笑むのだ。

### NEPAL YOUTH STUDY TOUR 自信につながったスタディツアー

八島 晶子

高校生の時フィリピンのツアーに参加、今回で2回目になるツアーのテーマを「自分に自信を持ち、今後生きていく上での目標を見つける」とした。交流する中で日本人の生き方、考え方を伝えたいと思ったが、言葉の壁があって思うようにいかず、自信を失ったり落ち込んだりした。

しかしワークショップに参加、発表し、ホームステイを体験することによって、ネパールの家族の形や厳しい仕事について知ることができた。小学校を訪れた時に、ネパールの子どもたちは何と好奇心が強いのだろうと感じた。日本人が忘れていた心を見た思いがした。好奇心によって変わる事、得られるものがあることを知った。そのことが私の価値観を広げる糧になりそうだ。自分ひとりの力ではなく、皆がいたからということもあったが、私はこの旅をやり遂げられたのだ。そのことが何にも増して自信につながった。自分がツアーの前とは変わったのを実感している。

\*全文をお読みにになりたい方は、「ネパールYOUTH交流スタディツアー報告集」をお求めください。



幼稚園の子どもたちと

地球の木の仲間3名が、日本国際ボランティアセンター(JVC)のスタディツアー(2006年2月11日~19日)で、3つの村を訪れました。國分さん、佐藤さんにとっては初めてのラオスです。

## 開発の影響と村の暮らし

昨年、広大なセメント工場予定地に土煙が上がっていたラオス村には、巨大なセメント工場が建っていた。建設の決定は2004年で、村の水田と森をほとんど補償もなくかなり強引に接収したとのこと。その上、今ではセメントのために飲み水も汚染され、村全体の移転も考えなければならぬという。

昨年、ナムトゥン2ダム建設のため移転を迫られている住民たちの不安を聞いた。その後、政府の方針でJVCですら直接、村人の声を聞くことができなくなってしまった。政府の力が強い国でNGO活動することの苦労を改めて思った。

さて、今回訪れたブンフォアナータイ村には驚いたことに政府の資金で付近の川から用水路が引かれ、乾季だというのに水が豊かに流れていた。緑の水田が目に見え、乾季は雨季后一期作で、乾季には枯れた田に牛を放って糞を肥料とする。水路により二期作ができるようになり、さぞ水路はありがたいだろうと思ったが、水の使用料や化学肥料代など経費がかさみ、収支はトントンなのだそう。

JVCは、田んぼの一面で幼苗一本植えという実験栽培を行っている。12月に植えた苗1本が、2月には46株に分結していた。この方法がうまくいけば米不足も解消するのだが。

クアンカイ村には、村はずれにJVCが支援した井戸がある。8~9歳の女の子がロープをたぐり上げ、小さなバケツに入れる。それを竹製の天秤棒の両端にかけ、バランスを取りながら帰っていった。大人用のバケツを担いだところ、重くて持ち上がらなかった。7、8歳から手伝っているという女の子の姿はゆったりとたくましく、優雅でさえあった。

(ラオスチーム 中野真理子)

## 夢がかなったラオス行き



森で出会った少女

ホワイタート村には、村を見守るかのようにマイニヤンという大木が寺の境内にどっしりと立っていた。幹に穴をあけ、灯りのための樹脂を取る木で、代々守りついできた。マイニヤンに見送られるように森へ続く道を行くと、乾いてひび

割れた田んぼが広がる。山裾には植林した竹の茂みがあちこちに見える。畑の柵やかご、家の建材にするのだそう。

森の奥にある水源から流れ出る川辺に、水牛の群れがいる。母親に連れられた子どもが水浴びをしている。少年が3人、草の茎に小魚をびっしり串刺しにして下げてきた。森の入り口では、少女と母親に出会った。背負った竹かごには、森の恵みの山菜などが入っている。明るい森には食用、薬用の植物がたくさんあった。

昼食は、村の女性たちが用意してくれた。もち米のご飯、魚の塩焼き、アリの卵と魚と野菜たっぷりのスープ、それにお酒が出た。日ごろは質素に暮らす村人のもてなしに、おなかと胸がいっぱいになった(湘南ランチ 國分 純子)

## 村の女性は働き者~ホワイタート村にて



糸をくるナポーさん

森歩きから帰ると、ナポーさんという女性が高床式の家の下に据えた織機の前に座って待っていた。木綿糸の織りと糸繰りを見せてくれる。糸はカボックという木の実に詰まっている綿をよったもので、手ぬぐい、

布団側なども作る生活に欠かせない木だ。

ナポーさんの朝は、一番鶏の声で始まる。雨季は田んぼ仕事のあと7時ごろ朝食。それから家庭菜園(畑)、糸繰り、はた織。井戸から水を運び、囲炉裏で食事を作る。最近、ようやく電気が通ったが、村の人々の重労働は日本の昭和20年代以前のような。ナポーさんは寂しそうな顔で「働くばかりで楽しみはないわ」とつぶやいた。

自給自足の生活だが、子どもを学校へ行かせるには現金が必要になる。病気になったときも医者に払うにも現金が。青年海外協力隊の看護師は、治る見込みがない病気だとわかると病院からさっさと帰る人が少なくないのだと言う。こう書くと、ラオスの村の生活はとても悲惨に受け取られるかもしれない。が、人々の表情は明るい。ナポーさんは、この村から出たいとは思わないと静かに言った。食べていけるからだ。森の恩(めぐみ)である。

国が豊かになることと、生活の改善と、人々の幸福感。その関連は複雑でわからないことは多いが、弱い側の立場から見なければ、ふたたび思う。

(事務局スタッフ 佐藤 葉)

**データ**：①面積は日本の本州とほぼ同じで人口は北海道ほど。“森の国”といわれ森は、1950年に国土の80%だったが2000年には40.1%に減少。政府は、2020年までにアジアの最貧国から脱却すべく開発を進めている。GDP402ドル、経済成長率6.5%。人口の8割が、農村で伝統的に森に依存する生活を送っている。

②森林には、保護林、保全林、利用林、再生林、精霊林、荒廃林という森林区分がある。村人が生活に利用するのが利用林だ。

\*報告書「ラオスの森・村の暮らし」もお読みください。



スタディツアーのメンバーたち

## 変化するネグロス

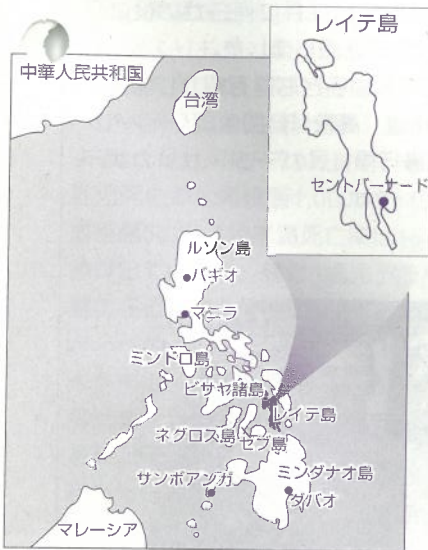
西ネグロス州の州都バコロドは、空港もある大きな町です。私が初めて訪れた6年前に比べると、今年1月の訪問時、町はずっと都会的になり、いろいろおしゃれな店もできました。6年前は信号機がなくてもすむほどの車の量でしたが、今回、「右折するのはどうするの?」というくらい対向車が走っていました。マクドナルドも2店出現していました。こういう状況はネグロスが今まだ砂糖の島であり、砂糖の国内での買い取り価格が上がっているので景気が良くなっているからだとなりました。こうなると私たちが支援している農民たちは、サトウキビ労働をやめて個人農家となり野菜作りに転換したのは良かったのだろうか、などと考えてしまいます。

しかし今回、シアソン農園の3家族に「野菜作り農家になってどう変わりましたか」とインタビューすると、「以前は1日3回食べられなかったが、野菜を作るようになって教育費も出せるようになった」「貯蓄ができた」「家族で協力して労働するようになった」「以前は1年に1回しか収入がなく借金で生活が苦しく、きつい労働と化学肥料のせいで体調が悪かったが、今は暮らしを自分で考えられるようになった」など、野菜栽培に換えてよかったという話をたくさん聞くことができました。が、問題も生まれています。石油の高騰によりガソリンの値段が上がっているために、広範囲にわたるPAP21のモデル農家から車で野菜を集荷するのがおぼろしくなって、朝市などの販売のプロジェクトに支障をきたすようになりました。また最近の諸物価高騰も生活に影響を与えています。

高級住宅街にスラム街という人々の暮らしの大きな格差に、「豊かになる」ということはどういうことか、これから私たちはネグロスの人たちと共に地球市民として互いに交流しながら考えていかなければならないと、変わっていくバコロドの町で改めて思いました。(フィリピンチーム 広瀬 康代)



すごい豪邸にびっくり!



レイテ島：第二次世界大戦時には日本の侵略を直に受け、戦後はアメリカの政策に翻弄され続けてきた。

## ありがとうございました！レイテ島地すべり被災者募金

2006年2月17日に起きたレイテ島の地すべり被災者緊急支援のための募金には、多くの方からご協力をいただき(5月20日現在総額167,191円)ありがとうございました。

3月末に現地を訪れたJCNCのスタッフからの報告によると、支援先のギンサウゴン地区は標高700メートルの山が山頂付近から崩れ、その土石流が村を完全にのみ込んでおり、土石流の量が多いため、遺体の捜索は困難を極め、捜索は3月初めに打ち切れ、一帯は墓地として管理されることになったそうです。

カトリック社会活動センターには、両親をなくした41人の子どもたちが保護されていて、シスターたちの献身的なケアを受けています。また同センターは被害にあった1,388家族の支援と、救援物資の配布を行っています。

支援金はネグロス島のオルタナティブ財団と交流のあるこのカトリック社会活動センターを通じて、人々が避難所を出て普通の暮らしをできるようにする生活プログラムに使わせていただきます。

## バキスタン報告 皆さまの募金でトイレが設置されました

バキスタン地震救援募金への温かいご支援ありがとうございました。私たちの募金を託した日本国際ボランティアセンター(JVC)現地駐在員の藤井さんからの報告です。

『現地では、トイレ設置などの衛生環境の支援活動が着々と進められています。JVCはトイレの部材を提供し、設置指導をおこない、被災者が自分でそれを組み立て、取り付けます。その後は定期的な巡回フォローもおこなっています。トイレの設置が完了した被災地の皆さんからは、「地震で家が壊れてから、トイレは外で済ませていました。これからはトイレで安心してできます」「今までは外でしなければならなかったのが、がまんして夜暗くなってからこっそりしていました。今はこのトイレでいつでもいけるからとっても助かっています」等、感謝の声があがっています。

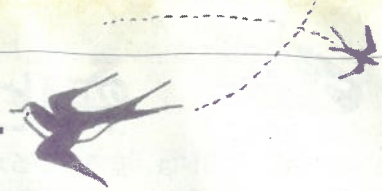
さらにJVCは現地NGOと共同で学校トイレ事業を開始し、中期的な(約2年間)使用に耐えうるトイレを建設しています。巡回衛生指導員が生徒たちにトイレを綺麗に使うこと、トイレから出た後に手を洗うことなど、衛生教育もおこなっています。』

(\* JVCの緊急支援は7月末を目処に終了する予定です。)(事務局長 筒井由紀子)



できあがったトイレの前で

## 里親型支援を始めます



チャイルドケア・センター支援プロジェクトは終了し里親型支援が始まります

2000年2度目のカンボジア訪問の時、6人の兄弟がチャイルドケア・センターに招かれていました。まだ、入所はしておらず着せられた体に古着のTシャツを着ていました。長男（13歳）、二男、三男、長女、二女、四男と皆ケアセンターに入所できることを喜びはしゃいでいました。三男までの3人は父親がエイズで亡くなったあと、学校もやめて親戚で重労働をさせられていたそうです。そのうち3人が地球の木の里子になり、会報の中で度々紹介してきました。

あれから6年がたち、彼らの後にも次々と子ども達が入所し、現在は20人が生活しており、そのうち3人が独立して働くようになりました。生活費や学費の支援は子

も達の体を作り、知識を深めることに大いに貢献しました。また、地球の木のメンバーの毎年の訪問は人に対する信頼感を彼らの中に育てたことと思います。年末募金やホワイトバンドの収益、地球の木の会費から子ども達が暮らす施設を作り、将来の夢へ向かって頑張る子ども達の未来を開くことができたことは大きな成果です。

応援して下さった皆様、本当にありがとうございます。

これからも多数の方が里親チームのメンバーになって子ども達を応援して下さるようお願いいたします。

(カンボジアチーム 小泉 恵子)

## 地球の木の3人の里子の支援をお願いします

地球の木ではチャイルドケア・センタープロジェクト終了に伴い、今まで継続して養育費を支援してきた3人の里子に対し、彼らが自立するまで責任を持って支援していきます。

支援の方法は里親型支援とします。

2003～2005年とチャイルドケア・センターの子ども達に会いに行き、彼らの明るい笑顔は私自身を元気づけて

くれました。私達の支援が彼らの成長に何らかの役に立っているのを見て、大きな喜びを感じました。

地球の木で支援している3人の子ども達を紹介します。バーン・ソッチーエ君（18歳 高校1年生）、バーン・ソッチャイ君（18歳 僧侶修行中）、バーン・サッカナーちゃん（15歳 中学1年生）です。



バーン・ソッチーエ 18歳  
モニボーン高校1年  
将来の夢：NGOスタッフ



バーン・サッカナー 15歳  
アンコール中学1年  
将来の夢：ホテルマネージャー



バーン・ソッチャイ 18歳  
バタンバン僧院で修行中  
将来の夢(?)：20歳までは修行

一番上のソッチーエ君の場合、彼は高校1年生。高校はチャイルドケア・センターのあるトコ村からは遠くて通学できないので、バタンバン市内で暮らしています。下宿(?)先はカンボジア支援の現地パートナー「るしな」の事務所です。彼の食費は1日3,500リエル。1米ドルが

4,200リエルで、日本円に換算すると1日約98円の食費となります。日本のうどんのような軽い食事が1,000リエル。いかに物価の安いカンボジアでも、これでは食べ盛りの彼のお腹は一杯になりません。何とかしてあげたいと、母親の気持ちで心配しています。

皆様から里親を募り、子ども一人支援額・月6,000円を予定しています。沢山の方の参加をお待ちしています。

(里親世話人会代表・佐々木慧子)





心に響いた"地球の木チャリティーライブ"

\*\*\*\*\*ラトルスネイク・アニー 平和を歌う\*\*\*\*\*

カンボジアの現在と子ども達の現実

横川 芳江

カンボジアでは長い内戦に終わりをつげた「パリ和平協定」から今年で15年になります。復興は進んでいるように見えますが、急激な市場経済導入と巨額な援助により都市と農村、富める人と貧しい人の格差は広がっています。首都プノンペンでは新築ビルが立ち並び、高級車が走り、冷房の効いた大型スーパーでは人々が買い物を楽しみ、生活が豊かになったように見えます。しかし一歩首都を出ると、昔と変わらない不安定な農民の生活があり、経済的な格差が明らかに見て取れます。現政府は荒廃した国を安定させ、経済的成長を進めているとの自信から、批判勢力を排除し、独裁体制を強めています。その背景には巨額の援助があります。世界の援助を調整する「支援国会議」では、カンボジア政府の要求し金額よりも多くの援助が集まりました。安易な援助は格差を広げ、腐敗を助長します。

UNDP (国連開発計画)「人間開発報告書2006」によると、カンボジアの最貧層と最富裕層を比較した時、乳児死亡率は最貧層1,000人当たり109.7に対して最富裕層50.3。5歳未満死亡率は154.8対63.6と2倍もの差が出ています。また1歳児予防接種率では、最富裕層の子どもの67.7%が受けていますが、最貧層では28.6%の子どもしか受けていません。生まれた子どもたちは、安心して育てられる家庭があり、基礎的な教育を受ける権利があります。経済の仕組みや生まれた環境が子どもの命に差をつけている現状を、私たち日本の援助が引き起こしているとしたら黙って見過ごすことが出来るでしょうか。



地球の木の活動に共鳴し「私を使って」と申し出てくれたこと、そしてサークル「Tea & Talk」がそれにすばやく応え動いたことで実現、53名の人たちが集まりました。サークルのメンバーのひとり、森谷八重子さんに感想を寄せていただきました。

\*\*\*\*\*

コンサートのお話を聞いた時から興味津々で参加しました。ポスター配りから会場の下見、ステージの準備などに関わることで、コンサートへの期待はますますふくらんでいきました。

東戸塚駅近くの会場で初めてお会いしたアニーさんは予想外に小柄でほっそりとした人。でもギターをひきながら歌われる声はびっくりするほど迫力があって、力強くそれでいて美しい声でした。コンサートは、社会的なメッセージのある自作の曲に加えて日本の曲やテネシーワルツなど、みんなが知っている歌を合唱したりとバラエティーにとみ、また通訳の方の簡潔でわかりやすい訳で詩の内容もよく理解でき、会場は一体となって楽しい時間を過ごすことができました。

質問の時間での丁寧な応答は、アニーさんの誠実な人柄がよく伝わってきました。また来年も桜の頃にアニーさんのコンサートができればいいですね。  
(Tea & Talk 森谷八重子)



ラトルスネイクは  
ガラガラヘビ

- 当日の収益44,670円は地球の木に寄付されました。またレイテ島への募金も3,250円集まりました。
- Tea&Talkは、東戸塚で16年続いている英会話サークル。英語をしゃべりたい人が月一回集まって一時間英語で話し合います。この4月から地球の木事務所でも「地球の木サロン」の講座として始まりました。詳しくは事務所まで。

活動報告 (3月~5月抜粋)

- |                                 |                                   |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 3月 1日 第11回理事会                   | 24日 マジカルシュガー教材作成ミーティング            |
| 4日 カンボジア報告会 (ほくふ)               | 25日 第14回理事会                       |
| 6日 マジカルシュガー教材作成ミーティング           | JANIC個人情報保護勉強会参加                  |
| 10日 第8回ランチ連絡会                   | 29日 平和と環境を考えるDAY参加 (西湘)           |
| 15日 第12回理事会 JCNC合同評価会           | 5月 2日 マジカルシュガー教材作成ミーティング          |
| 16日 カンボジア報告会 (とうぶ)              | 6日 地球の木サロン「エッセイ修行」                |
| 17日 「平和・人権学級」出前講座 (高津市民館)       | 7日 横浜インターナショナルスクール・フードフェア参加       |
| 21日 ネパールユース交流スタディツアー報告会         | 8日 ラオス報告会 (JVC名村さん)               |
| 25日 ラオス・スタディツアー報告会              | 11日 第15回理事会                       |
| 26日 地球の木ライブ「ラトルスネイク・アニー平和を歌う」   | 13日 なんぶランチ総会・地球の木サロン「アロマテラピー」     |
| 28日 アジアンフェア&地球の木カフェ             | 平楽中出前講座「ネパールわくわく講座」               |
| 4月 3日 第9回ランチ連絡会                 | 13日・14日 鎌倉市市民活動センターフェスティバル参加 (三浦) |
| マジカルシュガー教材作成ミーティング              | 17日 地球の木サロン「Tea&Talk」             |
| 5日 第13回理事会                      | 18日 マジカルシュガー教材作成ミーティング            |
| 8日 地球の木サロン「Tea&Talk」            | 20日 第7回地球の木総会・JCNC総会出席            |
| 14日 監査                          | 21~28日 カンボジア調査ツアー (収益チーム)         |
| 15日 ラオス・フィリピンスタディツアー報告会 (湘南・西湘) | 22日 フィリピンネグロス報告会 (JCNC大橋さん)       |
| 17日 監査                          | 25日 ラオス報告会 (JVC新井さん)              |
| 18日 福島市立大島中学校生徒事務所訪問            | 28日 茅ヶ崎カトリック教会バザー参加 (湘南)          |
| 21日 平楽中教員研修「マジカルバナナ」            | 30日 生活クラブ生協神奈川総会出席                |



## 地球の木15周年記念イベント予告～乞うご期待！ 地球の木支援地訪問ツアー モニター大募集！

15周年を記念して、会員の中から2名を地球の木支援プロジェクト地へ、モニターとして派遣します。  
1人15万円程度（航空運賃、現地宿泊費・交通費など）を地球の木が負担します。  
時期：11月～2月（一週間程度）詳しくは、9月の会報誌でお知らせします。

## 「ともだちいっぱい大集合！」 南北コリアと日本のともだち展

日時：6月29日(木)～7月5日(水)  
9:00～18:00  
(最終日は16:00まで)  
\*7月3日(月)は休館日  
場所：東京都児童会館  
地下展示スペース  
JR渋谷駅東口下車 徒歩7分



内容：日本、在日コリアン、韓国、北朝鮮の子どもたちの作品展示／韓国の子どもたちを招いて子どもワークショップ

南と北のコリアの子どもたちと日本の子どもたちが描いた絵とメッセージを、ご覧いただきます。同じように見えても背景など少し違う絵。生活の様子も見えて…。興味深い絵画展、どうぞ足をお運びください。

## 梅雨を吹き飛ばそう！地球の木カフェ



日時：6月30日(金) 11:00～18:00  
場所：地球の木事務所

年4回開催のオープンオフィス「地球の木カフェ」。熱い思いの込められたアジアグッズを見て買って、梅雨の気分を吹き飛ばしましょう。ラオス・カンボジアからグッズを新入荷。地球の木カレー、飲み物、フルーツ寒天などの手作りお菓子も用意しています。

## 始まりました！ 地球市民教育チーム定例ミーティング

日時：毎月第1月曜 10:30～  
場所：地球の木事務所

新たに設けたミーティングは、地球市民教育のワークショップや教材について研究します。ぜひあなたもメンバーになってワークショップに出かけませんか。

## 興味津々、マジカルシュガー・ミーティング

日時：毎月第1月曜 13:30～  
場所：地球の木事務所

「砂糖」をテーマにした開発教育教材を制作しています。砂糖の歴史、使われ方など、興味深いことが次々に飛び出して、楽しい時間を過ごしています。どうぞ一度お訪ねください。



## かながわ国際協力フォーラム ～ふれあおう！神奈川の国際協力～

日時：7月8日(土) 13:00～17:15  
場所：JICA横浜国際センター4階  
(みなとみらい線馬車道駅下車 徒歩10分)

参加費：500円

内容：基調講演 「国際協力とは」伊藤千尋氏  
(朝日新聞外報部)

分科会：①女性 ②こども、教育、障がい者  
③農漁村開発 ④在住外国人

交流会：17:30～19:00(有料)

主催：横浜NGO連絡会

神奈川県内で国際協力に関わるNGOや交流協会、JICA、行政などが一堂に会するイベントです。様々な立場で国際協力を進めている人たちと出会い、交流を深める良い機会です。地球の木は分科会「女性」に参加します。



## 港南台国際協力まつり ～世界の種、見～つけた！～

地域のNGOが商店会の皆さんと一緒にあこなう夏祭り。世界の踊り、食べ物、雑貨、ビアガーデンもあります。地球の木はなんぶランチが出店します。夕涼みがてら来てみませんか？

日時：7月29日(土) 30日(日) 15:00～20:00  
場所：港南台テント村 JR根岸線港南台駅徒歩1分  
(三菱東京UFJ銀行の隣)

主催：横浜NGO連絡会、横浜港南台商店会

協力：横浜国立大学「国共」、ひな、まちづくりフォーラム港南

## 地球の木サロン 6月からの新講座

■韓国語講座がオープンいたします。

「ハングルに親しむ」

日時：毎月第3土曜日14:00～16:00第1回7月15日(土)

講師：寺西澄子(JVCコリア担当)

受講料：1,500円(地球の木会員は1割引です)

■単発講座 ビデオ講座(全2回)

JVC広報担当の広瀬哲子さんが、楽しくわかりやすく教えてくれるビデオ講座です。7/1は「撮影のコツ」、7/29は「はじめてのビデオ編集」です。

日時：7月1日(土)、7月29日(土) 13:30～15:30

受講料：1,500円/1回(地球の木会員は1割引です)

\*各クラス定員は8名です。申込み先着順といたします。